

## ニコス・カザンザキス

### 『ミハリス隊長』第一章（一）

其原 哲也 訳

翻訳家

国際カザンザキス友の会日本支部会員

ミハリス隊長は齒軋りした。怒りが乗り移ったとき、そうするのが普通であるように。唇から右の大歯がむき出しになり、黒い口髭の間で仄光った。メガロ・カストロニの人々は彼に猪隊長という上手いあだ名をつけた。乱闘騒ぎがあった時、猪隊長の丸い真つ黒い目と短く強いうなじ、太く重い骨から出てくる怪力、でっばった犬歯は、人間を見て襲い掛かろうと尻を持ち上げる猪に実際によく似ていた。

手に持っていた手紙を皺くちやにして襦子の太いベルトに差し込んだ。そのような時には何度も読み返して内容を理解しようと思死に努力していた……甥は来ないだろう、彼には分った、復活祭にさえも、寂しがつている母親と不幸な妹は今年も兄に会えないだろう、なぜって、つまり、兄はまだ大学にいたからである……『一体何を研究してやがんだ？ まだ研究するつもりか？ ユダヤ人と結婚しておいてどの面下げてクレタに帰ってくるつもりか！ 糞でもたれろ、コストロス兄貴、あんたのかわいい息子は俺たちの親戚なんだぞ！ へん、おめでとうございましたね！ お祝いに俺があいつの足首をひっ捕まえるから、あんたが革袋みたいに梁から逆さに吊るせ！』

立ち上がった。雲を衝く巨漢で、頭は店の天井まで届いた。棘のような髪の毛をまとめていた黒い房飾りのついた頭巾が勢いでほどけた。ミハリス隊長はそれを引っ掴んでねじって大頭にきつく縛り付け、また跳ね起きて空気を吸うために扉の前に立ち止まった。

見習い小僧のハリトスがボートの浮き輪の綱を折りたたんだ。こいつは猪子のような田舎者で、黒い肌、おどおど、きよろきよろした目つきで耳が大きく、自分の周りの帆布やカインバス、塗料、タール、太い鎖、鉄製の錨、ボートの刺し棒

と道具一式を訝しげに見つめた。恐ろしかったので、その時敷居のところに立って扉をふさいでいた親方をそれ以上見ないで、外で港の方に向かって綱の端を編んでいた。親方でもあった叔父さんを恐れていたので命令に従っていた。

『今夜の面倒は割があわないな』ミハリス隊長はつぶやいた。『あのトルコの犬めは何がしたくて俺をわざわざ来させようと呼びつけるんだ、つまり、今夜人気の全くないところへ？今は甥の面倒も抱えてるのに！ あいつのおっかさんは俺があいつに手紙を書くよう仕向けた。俺はあいつに手紙を書いた、でもあいつは返事を書く労さえ出し渋りやがったのだ！』

左手に港の方を——小帆船<sup>ヨット</sup>を、小舟を、海を——見つめた。彼方まで港が喰っていた。商人たち、水兵たち、船頭たち、沖仲仕たちが、陽が衰え城門が閉まる前に仕事を終わらせようと、オリブ油の樽とワインの樽、イナゴ豆の山の間を行ったり来たりし、叫び、罵り、牛車に荷を積み、降ろし、急いでいた。海は荒れ気味で、港は傷んだシトロン<sup>シトロン</sup>と豆の山、ワインとオリブ油のにおいが立ち込めていた。こてで白粉を塗った二三人のマルタ人の中年女が岸壁にまっすぐ立ち、かすれ声でキヤーキヤー騒ぎ、魚を積んで到着した太いマルタのトルロール船に合図を送っていた。

陽は傾いて沈み、この三月も末の日は去っていった。身を

切るような北風がつかの間吹いた。メガロ・カストロは寒くなった。商店主たちは両手をこすり合わせ、足を震わせた。温まるため来路花<sup>カスチヤ</sup>を、ラム酒を飲む者もいた。彼方では、ストルンブラス山<sup>ストルンブラス</sup>の頂に雪が降り積もり、さらに向こうに群青色のプシロリティス山地が聳えて、白い端正な帯のような根雪が深く風も届かぬ割れ目の内に磨き上がっていた。しかし上から大空が、鋼鉄のように曇りなく光沢を湛え輝いていた。

ミハリス隊長の目は、港に入るとすぐ右手にある胸に翼のついたヴェネツィアのライオンの大理石像のある広く頑丈な塔である巨大なクレーレスにくぎ付けになった。メガロ・カストロ全体が自然にそびえ立つ崖に囲壁されていた。それは基督教徒の奴隷<sup>スレーブ</sup>たちが昔のヴェネツィア支配時代に建設し、彼らの苦役でもってヴェネツィア人、トルコ人、羅馬<sup>ローマ</sup>帝国<sup>ローマ帝国</sup>民が水を引いたのである。そこにくぎ付けを打った跡をとどめていたのは、ヴェネツィアの石の獅子がその鉤に福音書を縛っていた時、砦にくぎ付けにされていたトルコ軍の刃、血塗れの秋の日にトルコ人が長い年月の絶望的な封鎖の後にメガロ・カストロに踏み込んだ時だった。今、いたるところ、割れかけた岩の間からいちじくやイラクサ、風蝶草などの崖草が芽を出していた。

ミハリス隊長の目は下を向き、クーレスの地下礎石をとらえた。こめかみで静脈が膨らんだ。ため息をついた。これらの礎石は今波が打ち寄せているが、かつて呪われた地下牢だったのであり、そこに幾世代もの基督者の英雄豪傑が手足を鎖に縛られて疲労困憊していたのだった。不可能なのだ、つまり、体はいくら強くても、クレタ人の魂を目覚めさせることは、不可能なのだ……くそつ、俺たちクレタ人にクレタを解放するまで百年、二百年、四百年耐えることのできる鋼鉄の体が無かったことが。そしたらその後で一切を焼き尽くせるのに。

体の内で怒りが再燃した。在外ギリシア人でカトリックに改宗した甥のことが思い出された。

『大学とかいう代物、で、何を一体勉強してやがるんだ？ あいつも兄貴のテイティロスみたいになるだろう、教師つてやつに！ 厚底メガネの尻ばさみ、表六玉にな。我が家の豚は良い豚じゃ、水疱持ちが出おったが！ ちきしょう！』

唾を周りに弾き飛ばした。そしてすぐに外出して、向かい側の小間物屋のデIMITROSおやじの店に向かった。

『どこで落ちぶれた、トルコ人殺し魁傑ミハリスの不恭順者の一門よ！』

恐るべき祖父、魁傑ミハリスが全身全霊彼の内で生き生き

と弾けて満ちた。彼は、息子や孫がいる限り生き続けるのだ！ 時折古老たちは、もし水平線の彼方からモスクワの船団が現れると、彼が屋根瓦を手にとってクレタ島の海辺を遠くから眺める姿を思い出していた。彼は大きなトルコ帽を斜めに被ってまさにこの場所、大城塞の城壁を行ったり来たりし、呪われたこのクーレスにもたれかかり、トルコ帝国に面と向かつて『モスクワ人は南下する！』を歌ったりした。髪と髭は長くベルトで縛った背の高いブーツを履いて、全く脱がなかったといわれている。長い黒いシャツも着ていた。なぜなら隷属したクレタ島は喪中であり、日曜日に散歩して礼拝した後に、亡き祖父の古い弓を肩にかけ、矢師と共にいっぱいに矢を背負った。

『彼らは男だった』ミハリス隊長は眉根を寄せて呻いた。『彼らは見所のある男たちだった。それに比べて俺たちは、小人だ！ そんな彼らの妻たちはさらに手の付けられないじやじや馬だった。ああ、何てことだ！ 衰えた、落ちぶれた人間つてやつは堕ちてゆく！』

はらわたのうちで、祖父の後ろから、記憶の扉を跳ね上げて、骨ばった、粗野な、獣じみた泥んこまみれの爪をした祖母が現れた。彼女はかなりの老齢になったとき、子供や孫やひ孫で満杯の丸い庭を打ち捨てて、故郷の村の上手のプシロ

リテイス山の山腹にある深い洞窟に隠れた。二十年間その穴の中にこもり続けた。村で結婚していた一人の孫が、毎朝大麦パンの耳とオリブ、一瓢の葡萄酒を届けた——水は洞窟の中にたくさんあったので。復活祭が来ると、二個の赤い卵を主基督を思い出すために壊った。そしてこの老婆は毎朝洞窟の入り口に上がってしゃがみ込み、長い髪、長い爪、襦袢を着纏って真つ白な幽霊のように昇る太陽を遠い目で見つめ、長い時間筆を揺り動かし、太陽を賛美するがごとく呪うがごとく、そしてふたたび山の地下水脈に溶けてゆくのだった。

二十年間閉じこもっていた。だがある朝姿を見せなかったの村人は理解した。村の司祭を呼んで薪に灯をともして降りていった。骨と皮だけになって丸まって、洗礼盤のような小さな穴ぼこの中で腕を十字に組んで、頭は膝の間に突っ込んで発見された。

ミハリス隊長はかぶりを振った。視線を地下牢から引き離し、彼の内の死者たちに再び思いを潜めた。

差し向かいの店ではデイミトロスおやじが起き抜けの寝ぼけ眼で狭いソファアの上に胡坐をかき、馬の毛で作った削を持ち左右に動かして、丸く一列に並べられたカーネーションとナツメグ、ヒオス島のマスティハ、シナモンの袋と月桂樹油とミルテ油の瓶から蠅を追ひ払っていた。つねに青ざめて

瓢箪のようで元気がなかった。いつも体を掻き、いつもあくびをし、いつも見間違いをし居眠りをしていた。まだ眠っていないくて正面にミハリス隊長が立って彼を見つめたと見えたので、それではと削を持ち上げて今晚はとあいさつした。しかし厳めしい隣人が頭をそっぽ向けたので、デイミトロスおやじは再びあくびをし始めた。

ミハリス隊長は手を太く色とりどりのベルトに突っ込んでしわくちやの手紙を探し当てると、取り出してバラバラに千切った。

『一族に恥をかかせる教師はうちにはふさわしくなかったのに、今はあいつもなつてしまった！ 誰の息子だ？ あんたのだ、コスタロス兄貴、たいまつを奪って火薬庫に火を点けて、アルカディ修道院を、聖人と基督のアイコンを、修道士たち、基督者たち、トルコ人たちを木っ端微塵に吹き飛ばした！』

名高いリラ弾きのヴェンドウズスが厚手の外套に身を包んで急ぎ足で港に降りてきた。自分のタヴェルナのために一樽のキサモス製葡萄酒を注文して受け取りに行った。しかし途中でミハリス隊長を遠くから見かけたので頭巾を目深に下して勘良く踵をめぐらした。

『今夜はまた竜がえらく塞ぎ込んでいるな。ルートを変えた

方がよさそうだ』とひそかにつぶやいた。

太陽はストルンブラスの岩山の端にさらに沈んでいた。道路には影が差した。尖塔は白から蔷薇色になり、港では商人たち、親方たち、労働者たち、船頭たち、舟の犬たちが夜明けから叫んで怒鳴ることに疲れ果てて、みんな穏やかになった。ミハリス隊長はベルトから煙草入れを取り出して、たばこをつまんだ。少しずつ怒りが納まってきた。たつぷりとした鳥羽色のあごひげを撫でて、微笑んで、再び輝く真つ白な犬歯を見せた。

『我が息子、トラサキよ、健やかなれ。あの子はうちを辱めないであろう。あの子は叔父のティティロスに色をなさしめるであろう。あの子はうちの血統に恥ずかしげもなくけちの血を混ぜ合わせたあの恐ろしく洗練された甥にも色をなさしめるであろう。あの子はその手にわが一族の旗を靡かせるであろう！』と、ぶつぶつつぶやいた。

そう言うのと、すぐに自分の人生は良いものに、神は正しいものに思えたので、ミハリス隊長はそれ以上悲憤しなかった。髭のない老人で、清潔だが襤褸を纏い木靴を履いたトルコ人がためらいがちに近付いてきて、おびえたような目を挙げてミハリス隊長をじつと見つめた。ミハリスは前かがみになって彼を見て首を動かした。

「どうした、アリ・アガ？」と出し抜けに訊ねた。

隣人だったがちつとも理解できず、なめくじ、二成、男でも女でもない、夕暮れ時に近所の羅馬帝國国民の女たちと一緒に座って靴下を編み、はしないおしやべりに興じていると大いに嫌っていた。

「旦那。ヌール・ベイに遣わされたんです。ええと、くれぐれもよろしくって、それで、今夜彼の陣屋に、ええと、ご足労もらえればうれしいので是非って」と、小柄な老人は口ごもって答えた。

「わかった。召使の黒人からもう聞いている。行け」

「ええと、絶対必要だからって」

「行けと言っただろう！」

アリ・アガの女つばい、宦官のような声を聞くのが大嫌이었다。アリ・アガは言葉をのみ込んで、ぶるぶる震えながら壁伝いの道を取って姿を消した。

「俺はトルコ人街で何を探しているんだ？ あん畜生めは俺にどうさせたいんだ？ なぜあいつが来ないんだ？ 俺は行かない！」

振り返った。

「ハリトス、家に行つて馬に鞍を敷いておけ！」と、大声で叫んだ。

突然、馬に乗って散歩をして気分転換がしたくなった。祖父、祖母、甥、ヌール・ベイ……憂さ晴らしをするために愛馬で散歩をしよう！

しかし店の鍵を外して閉めようと手を伸ばした瞬間、道路の端から涼しげで楽しげななきが聞こえた。ミハリス隊長は馬の声を認めて振り返った。黒いオリブの実のようにつやつや光った剣のようにすらりとしたものの、威風凜凜とした牡馬が湯気を立てながら現れて進んできた。丸々と太った素足のトルコ人の少年がそれを轡で保持し、振って有めすかして鞍を敷かないまま散歩して、メガロ・カストロを行ったり来たりして憂さ晴らしをしていた。遠くから来たのだろうか、飛ぶように速く走ってきて馬の口と胸と四つ足のつけ根は泡を吹いていた。しかしその勢いはまだ静まらず、泡を吹いた肩と汗びつしよりのたてがみを鼻息で荒立てながら力を発散していた。そして所々ですらりとした前足で砂利道を打ち、嘶いていた。

「ヌール・ベイの馬が通るぞ。気をつける、みんな！」シロス島<sup>七</sup>人<sup>八</sup>パラスケヴァスおやじの散髪屋の向こうから大声が聞こえた。

五六人のまだ散髪していない客と石鹸を持った男が戸口から外に飛び出してきた。彼らはぼかんと口を開けて首を伸ば

して立ち止まって、馬を誇らしく思った。

燃れた顎ひげのうかつ者が言った。「神かけて、神様に誓って、俺が『ヌールの女房』の代わりに彼の馬が欲しいか？ 選べ！』っていわれたら、馬を選んだらうな」

「お前は脳足りんだな！」と、髭を刺ったばかりのペンキ屋のヤンナロス、とがった上向きの口ひげをしているのでまたの名を「ベチコート猫」という男が遮った。「有名だろ、なあ、エミネ・ハヌームは、美人でさあ、はねつかえりで二十歳、おまけに野性的ときたまんだ。お生憎だ。あの女を選んでみなよ、お前のケツがふさがれるようにな！」

「俺は馬の方が良いと言っただろう、俺は漏らしたりしない！」山羊ひげ男がまた口を開いた。

「馬も人妻も、なあ同胞さんよ、馬だろうが人妻<sup>人妻</sup>だろうがもめごととは御免ですよ！」シニョール・パラスケヴァスが高く素つ頓狂な大声を上げた。飛んで出てきて手にはさみを持つたままだった。

山羊ひげ男が振り返って言った。

「なあ、シロス島製のルクミ菓子さんよ、もめごとって言うけど、いいか、人生は死だけが息抜きなんだ。忠告しとくが、俺たちクレタ人にそんなたわごとを言うなよ、あんたをそういう奴だと取って生き埋めにしちゃうぞ……」

かわいそうなシロス島人はぞつとした。穏やかな口調で話すこの純朴な小人物はどれほどクレタ島で落ちぶれてこんな野獣どものひげを剃る羽目になったかを怒りさえしなかった。山出しのクレタ人が彼の散髪屋の敷居をまたぐたびに、シロス島人は震え上がっておびえて見つめるのだった。どこから手を付けたらいいだろう？ この男は何か月ぶりにひげをそって洗髪するのだろうか、何年ぶりに髪を切るのだろうか。ナブキンをふるって鉄をつかみ、クレタ人が座っている椅子をぐるぐる回って戻るのであった。この驚嘆すべきお客様が鏡の前でその面を誇らしげにしているさまは、山羊の群れを率いる雄山羊みたいだと思われた。あるいは族長の長<sup>ハ</sup>聖ママス、シニョール・パラスケヴァスがいつかあるアイコンで見た全身体毛と何オカ<sup>ル</sup>もの顎ひげ、口ひげ、髪でおおわれてどの散髪屋もあえて手出しをしようとしなかったやつみたいだと思われた。

シニョール・パラスケヴァスの鉄は一気に小さくなったものだった。どこからこんな剛毛を、こんなもじやもじやの髪の毛を刈らなければならないのか！ 繊細なシロス島人はため息をつき、結局決心し、神の名において、石鹸水を使い始めたものだった。

「生きたまま？　なんで、おにいさん、私を生き埋めになさ

るつもりなんですか？」そう言つてこのうろたえた人は後ずさりした。

「なんで俺たちが、そんなたわごとをいう奴らを『生き』埋めにするか。俺たちが奴らをどう言っているか知っているか？」

「後生です、どう言っているんですか？」

「死人だつてな！」

シロス島人は息をのんだ。聞かなかったことにして中に入つた。

一八七八年の革命の時にトルコ軍に沈められた『ダルダナ』号の老船長であつたステファニスがちょうどその時びっこをひきながら通りかかった。彼を海に落としたトルコ軍の蒸気船の榴弾が、彼の膝を吹き飛ばしたのだった。そしてその時以来さらに松葉杖を陸地に打ち付けて、びっこをひきひき港界限を歩いて回つた。二本の松葉杖を持っていた。一本は松明であり、クレタ島の物事がうまくいっているときそれを持ち、もう一本は短い曲がつた棒で、物事が歪んで空気がきな臭くなつたとき持つたものだった。今日は短い曲がつた棒を持つて出掛けていた。おしやべりを聞いて立ち止まつた。

「おい、お前ら、喧嘩はやめろ。さもないとろくなことにならんぞ」と言つた。

「さてねー、ステファニス隊長、あんたは結局どうしたいんだ？」

「たわけどもが。決まっとうが。ヌールの馬に乗りたいたいじゃ。それでエミネ・ハヌームを後ろに載せたいんじや、聖ヨルギス様みたいにな！」

「俺もだ！」「俺もだ！」「俺もだ、ステファニス隊長！ 神様が聞いてくれたらなあ」クレタ人たちが、理髪済みの者もまだの者も喚<sup>わ</sup>いて大笑いが炸裂した。

視線を固定していたミハリス隊長は、改めて見つめていた。馬がその時彼の前を通り過ぎた。気取って、生きが良くて、しなやかな首をまっすぐ立てて、黒鳥のようだった。振り返って、ミハリス隊長を見て、目をきよろきよろさせた。彼を知っているかのように、一瞬近寄ってきて嘶いた。一步踏み出したミハリス隊長はもう堪えることができずさらに一歩前へ進んだ。馬に近付いて手のひらでじれったそうに触って馬の体の暖かさを感じて、掌を泡で満たした。トルコ人の少年は彼を見て立ち止まった。

ミハリス隊長は重い掌をトルコ石の首飾りと象牙の三日月で飾られたびしょ濡れの広い胸に広げて、どん欲に首を、鼻の穴を、額を撫で、くしゃくしゃの蠶<sup>ミミズ</sup>の中へ腕を絡ませ、飽くことなく可愛らしく背中と尻を梳いて、湯気を立てたお

腹まで下ろしていつて全く俺まなかった。この掌が馬を食い尽くさんと欲しているかのようだった。

そしてこの誇り高く愛嬌のある獣は首を湾曲させて、目利きの男のこの熱心な愛撫を嬉しがっていた。産毛の生えた大きな目を丸くして、男を見つめて、鼻の孔で撫でて頭を乗り出してかがめ、男の髪に熱い息を吹きかけた。そして突然戯れるために長い唇でミハリス隊長の黒いマントを銜<sup>くは</sup>えて高く持ち上げて、空中に振り回して元に戻そうとしなかった。馬のいたずらっぽい目は目の前の黒いあごひげ男にしばいたいたが、男は心臓が疲れ切るのを感じた。この獣はこんな誇り高い人間を見たことがなかった。語り掛けてなだめすかし説き伏せ始めると、馬は聞こうとしているかの如く首を下げて、男の肩の上に撫でさすりあおうとするかのごとくすり寄った。ミハリス隊長は素早く手を広げて馬の口からマントを托し取って、髪の毛についた跳ね飛んだ泡汗を前からあつたかのよう<sup>よう</sup>に包んだ。そのあとで向き直って、トルコ人の少年に顔いって撫でるのをやめたので、少年は去ることができた。

「行こう」ミハリス隊長はまだ馬を目で追いながらつぶやいた。馬は今や港の門のところまで進んでいた。「行こう！」突然意を決すると戻って店を閉め、暗い気持ちでヌール・ベいの陣屋へ向かって出発することにした。



ところでステファニス隊長は馬を懂れを込めて愛でていたのだが、曲がった杖に寄りかかってミハリスの前に立つて今晚はと挨拶した。彼はこのアラブ男を恐れなかった。彼もまた男で偉大な海の戦士だった。一八五四年、六六年、七八年のすべての革命で何度も『ダルダナ』号に乗って、トルコ人のバリケードを壊し辺鄙な人気のない海岸で食料と火薬を基督教徒側のために陸揚げをした。砲撃され、船を沈められたとき、砕けた膝に血を流しつつアヤ・ペラギア湾<sup>+</sup>に泳ぎ着いて、海面の上で歯に挟んでアテネの革命評議会からメサラ平原<sup>+</sup>の指導者コラカス隊長にあてた手紙を保持し続けた。その時から、落ちぶれて足は不自由になり、貧乏になり、着ている服はくたびれたが、いまだにつきはぎだらけの服で隊長然とした足取りで一日中港を散策し、誇り高く、異国の小帆船<sup>※</sup>に胸を焦がして、タールの匂いを嗅ぎつけ大声と歓声と海底の岩根をつかむ錨の音を聞くのを喜んでいた。身は流転し、ポケットは空になり、半ズボンは擦れて穴だらけになったが、気概はまっすぐ胸に立つて、船のへさきの人魚像のように海をじっと見つめていた。

そうして曲がった杖に寄りかかって、大胆にもミハリス隊長の前に立つて話し掛けた。

「のうミハリス隊長さんよ、じじいの話に耳を貸してくれん

かの。つまり、もしおぬしがエミネ・ハヌームの替わりに馬を取らなきゃならんとしたら、取ったじやろうか？」  
「俺はくだらない話は好かん」ミハリス隊長はそう言うのと、落ちぶれた船長を振り返って見つめることもせずに自分の店に退いて行つた。

しかし意地っ張りな海の男はミハリスが聞いていなくても黙らず、後ろからことばを浴びせた。

「彼女をのー、連れて来たんじやー、ヌールはのー、帝都<sup>※</sup>からのー、そうじや、チエルケス<sup>±</sup>女じや、絶世の美人で、凶暴で、人間を食ひ食うというのー。基督教者の黒人女からのー、一緒に来た彼女のばあやからのー、わしの近所のばあさん連中のフカロプリ姉妹が代官<sup>※</sup>所の窓格子越しに何が起っているかを窺ってくるんじや、また連中におしやべりさせよう、もつと探らせよう……」

「ステファニス隊長、言つただろう、俺は嫌いなんだ、くだらないおしやべりがな」ミハリス隊長はいらいらしてもう一度言つた。

しかしガサツな海の男は頑固に踏みとどまった。ああ、彼のおしやべりを止めることはできない。手練れのトルコ軍大艦隊さえ恐れなかったのだ、ミハリスごときを恐れるだろうか。好もうと好まざろうとすべてを聞かされるだろう。

「ミハリス隊長さんよ、ヌール・ベイはおぬしの義兄弟だつてことをな、忘れなさんなよ。おぬしの家がどうなっているかを知っているなら当然のことよ……なあ、代官<sup>ダイカン</sup>はのー、恐ろしい野獣じゃがのー、女の足元に這いつくばつてのー、飼いなされてのー、目を虜にされていてのー、女は火のついたタバコをのどに押し付けてきてクククツと笑っているのじゃ。のう、そしていつしか女の心は故郷へと向かい、馬糞と乳の匂いを、馬の嘶きを思い出し、突如癩癩に襲われて磁器のコップを壊し、香料をこぼして黒人女を叩くのじゃ……」

ミハリス隊長は嘔みつき癖のある牧羊犬のようにクンと鳴いて鍵を外し、大きな手で老練な水夫をドアのそばから離れさせて、店を閉めようとした。そして海の男はそれ以上退けなかったが話をたたみながつていた。こんな野獣とのおしゃべりに首をつっこまなければよかったのだ、そしてつれた話の一つ終えれば三十六計逃げるに如かずだ！ 雲行きが怪しくなつたので、大急ぎでおしゃべりをまとめた。

「のう、奥様<sup>おくさま</sup>はヌールの馬に嫉妬<sup>しと</sup>しとるんじや。おとといの夜ヌールが女を抱こうとしたら、女は逆らつて言つたのじや。『まずあたしの言うことを聞いてよ』『何でも好きなことを言ってくれ、我が妻よ、全部お前のものだ』『中庭に居るあなたの馬を寄越しなさいよ、よく見えるように明かりをつけ

なさいよ、それからそいつをあたしの前で屠りなさい！』代官は溜息をついた。首をかしげて、自分の部屋<sup>へや</sup>に行つて閉じこもつてしまった。そして一晩中彼が行ったり来たりして呻いているのが聞こえたとき。おぬしが了解しておくためにおぬしに言つとこう、おぬしに言付けたと、のう、彼の家に行けと。彼はそう望んでおる。断るなよ、アリ・アガがわしにそう言つたのじや。そういうわけで、あの夫婦が一触即発なことを詳しく知つといたほうがいいと思つてな」

ステファニス氏は胼胝<sup>へんし</sup>のできた両手をすり合わせた。恐怖に捉われることなしにおしゃべりを通し終えたことが嬉しかったのだ。

「わしの知っていることは以上じや、ミハリス隊長さんよ、わしの言いふらしていることは以上じや。嘘か真かは、フロプリ姉妹に当たれ、じや！」

ミハリス隊長が一撃を加えるとドアは激しく揺れて、閉まつた。彼は鍵をベルトに仕舞つた。漂流者の方に向きなかつた。

「あんたら船乗りは、人妻に敬意を払わないのか？」と輕蔑を込めて言つた。

そして足を進めて出発した。

「あんたら岡者の隊長様方は、自分の居場所もご存じない！

馬糞を踏んで、糞を踏んだと言いふらす！」ステファニス  
金切り声でやり返した。そして突然恐怖に捉われたかのよう  
に急いでびつこを引きながら脇に避けた。

ミハリス隊長は黒い頭巾をまっすぐ額にかぶった。房飾り  
が目を覆った。彼は誰も見ようとしなかったし、誰も彼を見  
ようとしなかった。そしてトルコ人地区の方に向かって重く、  
鬱鬱と進んでいった。

太陽はさらに沈んだ。トランペットが鳴り、兵士たちは鍵  
を手に取り、四つの城門に二重に鍵をかけた。誰ももう太陽  
がまた昇るまでメガロ・カストロからあえて出ることはでき  
なかったし、中に入ることもできなかった。毎夜そうであり  
それはトルコ人も基督教徒も一緒だった。

ゆっくりと闇が落ちてきて小路を覆った。女性はどう道路  
には出ず、家でランプをともし、テーブルクロスを敷いた。  
もつとも分別のある戸主たちは食事をするために急いでおの  
が家に戻り、最も職人肌の連中はタヴェルナに立ち寄って一  
杯ひっかけることにかけていた。闇に包まれたメガロ・カス  
トロは、腹が減って、夕食にありつきたがっていた。

三つ子の姉妹、フカロプリたちが家の扉の後ろにまっすぐ  
立ち、お互いくつつきあい、扉に高く三つの穴をあけておき、  
そこにその面をくつつけて、通行人を吟味してすべての人の

欠点と得意をこき下ろす時間だった。三人ともオールドミス  
で、生まれつき真っ白い髪と眉、睫毛で、ウサギのように赤  
いルビーの目をしていた。昼は全く外に出なかった。という  
のは、太陽の光で見ることができなかったのも、日が暮れて  
三つの穴の後ろに立って、通り過ぎていく世界をじっと眺め  
ることに焦がれていたからである。世間を眺める小穴ではな  
したくないおしゃべり、毒舌からは蠅さえも逃れられなかつ  
た。道路は人通りが多く、彼女たちの家の前の通りを境にト  
ルコ人の地区と基督教徒の家々が分かれていた。すべてを見  
て、誰にでもあだ名を貼り付け、そしてそれは一生消えない  
のであった。ミハリス隊長に猪というあだ名をつけたのも彼  
女たちだった。ミハリスの兄の学校教師にティティロスとい  
うあだ名をつけたのも彼女たちだった。というのしかつてそ  
の父親が村から大きなチーズを持ってきたとき、学者バカの  
息子は「何のチーズなの、これ、お父さん？」と叫んだこと  
があった。それを知ったフカロプリ姉妹は彼にティティロス  
というあだ名を賜った。

一日中薄暗がりの中で料理をして、洗濯し、裁縫をし、整  
理整頓をしていた。夫と子供の心配は免れていたのも、余計  
な考えに煩わされることはなかった。しかし神は彼女たちに  
良き兄、心優しい人、薬剤師のアリストテリス氏を遣わされ

た。惨めに働いて、朝から晩まで粉薬と塗り薬を作った。彼も結婚していなかった。ずっと立っていたので足はむくみ、青ざめ、辛抱強く、寡黙で、朝夕妹たちのところに買い物かごをいっぱいにして運んできた。彼もまだ若い時には、可愛らしく持参金をたくさん持った良家の娘に心惹かれることがあった、彼も容姿端麗で確かに年頃の若者であったので。アリストテリス氏の薬局はメガロ・カストロの中心部の広場であり、瓶や小瓶、香料や香料石鹸の匂いでいっぱいであり、毎晩そこには教師たちや医師たちが集まり、世間の話題について縦横無尽に論じていた……しかし内向的でいじけたアリストテリス氏は、聞くだけで話さず、疲れた水色の目で彼らを寂しく見つめ、禿げた頭で誰にでもあたかも「ごもつとも……ごもつとも……」と喋っているかのようには領いていた。でも彼は、現世での幸福が流れてしまったことを考えていた。彼も確かに結婚したかったが、女たち——神よ、守りたまえ！——のことを心配していたからではなく、「婚活」したかったというよりは薬局の方を取ったのである。しかし、妹たちの方が先に結婚しなければならないという掟から、どう彼女たちを自由にさせてやれただろう……年月が経ち、髪は白くなり、齒には虫歯の穴が開き、背中は曲がり、赤く色褪せなかったアリストテリス氏の頬は膨らんでたるんで萎れて

いった。アリストテリス氏は今はもうとてものもろくなり、年老いて活力が衰えてしまったので、マステイハ<sup>十三</sup>を嚙んでいた。しかし飲むのではなくむしろ嚙むのであった。嚙んでからおもむろに一日中調剤師先生は咀嚼した。晩に教師たちと医師たちが自由意志や魂の不死や、もしほかの星に住んだらという空想について議論しているのに耳を傾けているとき彼は禿げ頭で頷き、心の内で『今はもう結婚できるけれども、「婚活」なんかしないぞ……結婚なんかするものか……息子なんかつくらないぞ……』と何度も何度も繰り返しつつやいた。播粉木<sup>チリシ</sup>を持つてまっすぐ作業台に立ち、マステイハを嚙んで乳鉢で薬をとめてゆつくりとうんざりするぐらいまで擦った。

さてフカロプリ姉妹は今日は己がボストを早くから順不同に占めていた。肌寒く、毛は逆立って、手と葦のように細い脚はかじかんでいたが勇敢に屹立して、待っていた。今夜は何か匂つていた。とても変だった。ルビーのお目々を三つの穴に貼り付けて、まっすぐはるかにヌール・ベイの家の弓形の緑の扉に視線をくぎ付けにしていた。

「あんたたちの目はスクラエビみたいよ」次女のアグライアが中で何かを料理しながら言った。「一昨日黒人女が私たちに占ったことを思い出して！」

「今夜怒って村から帰ってきたお代官が馬を降りたわ」タリ  
アが返事した。「私は見たわ。一蹴り入れて扉を開けて、じ  
かの声と叫びが聞こえて来たわ。また召使いたちを殴ったん  
でしょう」

「どっちを選ぶかしら？ 馬？ エミネ？ 桑原桑原」フロ  
シニがゲラゲラ笑った。

しかし三美神が囁いているところへ突然道路が暗くなった  
ように思われたので、驚いて後ろに飛びじさった。お互い見  
つめ合った。

「ミハリス隊長よ！」もぐもぐつぶやいて、再び目を穴に貼  
り付けた。

喘ぎ喘ぎしながら、烏羽色のカールしたあごひげで、フェ  
ルトの半ズボンをはき、のろい忍び足のとてつもなくでかい  
男が通りかかり、頭巾の房飾りは両肩を覆っていた。壁伝い  
を行き、広げた掌は太いベルトに添えて、差し込まれた深く  
黒い柄のナイフを覆っていた。

彼を待ち伏せしている扉を掠るように通って、一瞬振り返  
った。彼の上に注ぐ六つの目を感じたかのように宵闇に白目  
をきらめかした。三つ子の姉妹は震えあがつて息を詰めた。

しかし男はゆっくりと重々しく通り過ぎ、緑の扉の真向かい  
にピタリ立ち、素早い一瞥を投げかけたが、あたりは一人

きりで、人っ子一人いなかった。細い路地をまたぎ越して、  
一押しでヌール・ベイの家の扉を開けて中に入った。

三つ子は声を大きく長く長く伸ばした。

「主よ、憐れみたまえ！」十字を切りながらアグライアが言  
った。「どんなふうに入ったか見た？ まるで海賊ね。」

「お代官の家で猪隊長は何を捜すつもりかしら？ きな臭い  
わね。賭けてもいいわ。お代官は彼に馬を売りたいんだわ：  
…」

「というよりエミネよ……」

そして再びアグライア、タリア、フロシニの三美神は声を  
囁らしておしゃべりに熱中し始めた。

ミハリス隊長は右足で敷居をまたぎ越し、その歩みの岐路  
に立った。扉の後ろに黒人が彼を待っているのが見えた。年  
老いた、繊弱な奴隷で、ヌール・ベイがその父親から相続し、  
扉の後ろで終日夜は真夜中までこっそりと黙っていた。夜は  
震えながら目を閉じた。なぜなら毎晩ご主人様が彼を殴ると  
いう同じ夢を見ていたからだだった。さらなる年月を殴られ、  
筵からごみ箱に捨てられ、老いた目を酷使して門で何度でも  
足を引きずって何度でも縮こまっていることに耐えられず、  
夜明けが来るのを待ち望んでいた。

ミハリス隊長を見るまで起きていようとしていたが、骨が

きしんで溜息をつき、痛がつていた。ミハリス隊長が指先で肩に触れると、老人はまたばったりと倒れてしまい、ミハリスを通り過ぎるままにした。バラとキンセンカの大きな鉢の間をゆつくりと進んだ。どこかでレモンの花が一輪咲いたのであるう、レモン花のそよ風が香つてきて、土は水をやられたばかりで肥料も生姜も匂つていた。庭の深みの仄かに光るところに、薄暗がりにお屋敷ぶりがうかがわれ、鳥かごに一羽の鶉がクックツと鳴いていた。そして高みの柳かごからは女性の笑い声がしていた。

ミハリス隊長は頭を傾けて、吐き気を催しながらトルコ風の空気を吸った。

『俺はここの中で何を捜しているのだろうか？』と考え込んだ。『トルコが匂いやがる！』

立ち止まつて、後ろを見つめた。潮時だった。誰も彼を見ていなかった。黒人だけだった。立ち去る潮時だった！ハリスはいま雌馬の鞍を敷いているだろう、騎乗するだろう、トリス・カマーレス<sup>十四</sup>の広場で乗り回すだろう、憂さ晴らしをするだろう！だが、恥ずかしくなった。

「俺は怖気づいたといわれるだろう」とつぶやいた。ミハリス隊長よ、前進せよ！

前に進んだ。もう決心していたので素早い歩みだった。中

の扉が見えた。開いていた。緑と赤の蠟燭に火の灯った大きな提灯が一丁鴨居にぶら下がっていた。その下に赤と緑に彩られたヌール・ベイが、門の音を聞き、足音を理解して、客人を迎えるために出てきた。

優雅で、ふつくらとして、広い肩幅で、真ん丸顔で、黒いアーモンド形の目で、黒い染料で塗り固めた髭の男が、提灯の下から、鋼鉄のような水色の輝きを投げかけていた。代官その人は、穏やかな中近東人女性のような美しさで、トルコ人女性たちが昔高価なペルシア風絨毯に織っていた満月顔のライオンに似ていた。水色の羅紗でできた半ズボンをはき、ベルトは鮮紅色で、縮れ毛を結わえ直した真っ白なターバンを被っていた。袖ぐりには香を焚き、春の猛った獣のような匂いがしていた。

一歩前に進み、太く短い指の手を差し出してきた。

「わざわざすまんな、ミハリス隊長、我が家まで呼びつけてしまつて。でも必要だったんだ、君だつてじきにわかるさ」と言った。

ミハリス隊長は怒つたようにうなつて、黙つたまま代官の後について男部屋へと入つていった。ある瞬間悪い予感が突然したので、敷居のそばに踏みとどまつた。素早く中へ一瞥をくれた。誰もいなかった。長椅子の手前のランプには灯が

ともっていて、大きな青銅の火鉢は燃えていた。焼けたレモンの皮が熱い空気に匂っていた。丸いテーブルがあり、隅っこには、酒のなみなみと満ちた大瓶があり、二つのグラスがあり、その隣にはおつまみが置いてあった。

脇と脇を並べて小さな長椅子に座った。ミハリス隊長は中庭につながる閉まった窓のそばだった。ヌール・ベイはベルトから半月状に真珠貨のついた黒い鉄製の煙草入れを取り出した。それを開いて、友人がつまめるように渡した。

ミハリス隊長は受け取って、たばこを一本巻くと、ヌール・ベイも一本巻いて、二人は吸った。かなりの時間黙ったままだった。代官は息をのんだ。どこから仕事の手を付けられればいいか、どう言えばいいか、客人を誤解させても怖がらせなくてもいいかと、要を抑えかねていた。ミハリスがかなり怒りっぽい男であることを知っていた。そして今夜彼に言わなければならぬことは重大なことだった。

「ラキを一杯飲もうじゃないか、ミハリス隊長」結局妥協した。「シトロソ果汁製なのだ。厚意で注文したのだよ」

「俺に何を言わなきゃならないんだ、ヌール・ベイ？」ミハリス隊長はそう言うのと、二本のグラスの上に掌を広げた。

飲みたくなかったのだ。

代官は咳をし、火鉢の灰の中に自分のたばこを握りつぶし

て捨てた。顔面は火のついた炭の上でゆがみ、銅のように赤熱した。

「自信をもつて言うが、ミハリス隊長よ、悪くならないでくれたまえ」と言った。

ヌールは助け舟を出してこの陰気な羅馬帝國国民が言葉を発するのを待った。しかし黙っていた。代官は立ち上がって扉まで行き、シャツの襟を広げて、また座った。履いていた外履きが突然きつく感じられたのだ。こっそり靴を脱いで素足を土にくっつけて涼んだ。

寡黙な連れのところに戻った。今度は決心していた。手を持ち上げて口ひげをひねろうとしたが、まっすぐ下ろした。明らかに、気の短い隊長は悪くもったのだ。

「君のお兄さんのマヌサカスが」と言っただけ息をついた。

「ミハリス隊長よ、君のお兄さんのマヌサカスがトルコを侮辱したのだ。おととい三月二十五日にまた酔っぱらって、ロバの背に立ちあがったままモスクに行って礼拝したのだよ。私は今村から帰ってきたところだが、わが親類たちがすべて上へ下への大騒ぎ、君の親類はすべて武器を取っていた。事態は今や焦眉の急だ。ミハリス隊長よ、言っておくがこの期に及んで口答えするなよ。私は君に言わなきゃならない借りがあった。君も渋々だが聞かなきゃならない借りがあった。

神が君にあらわし示すことをすればいい」

「なら飲む」ミハリス隊長は答えた。

代官はグラスを満たした。部屋いっぱいシトロンが匂った。

「ヌール・ベイ、汝の健康を祈って乾杯する！」

「私も君に抵抗する！」代官はミハリスの目を見つめながら静かに返事をした。

突き合わせた。ミハリス隊長は立ち上がり、頭巾から房飾りを退けた。

「ヌール・ベイよ、それを俺に言いたかったんだな？」答えた。「だから俺を呼んだんだな？」

「もし君が神の啓示を信じるなら」そう言って代官は軽くミハリスのベルトをつかんだ。「去らないでくれ。ここに火種がある。だが灯にもなりうるし、われらが村を焼く炎にもなる。君のお兄さんにわが国家を辱めないよう注文してくれ。

われらは同じ村の同じ土から生まれたではないか。座つてくれ、収めようじゃないか」

「俺の兄貴は六十歳で俺より老獪だ」ミハリス隊長は言った。

「子供もいるし無学だし利口だ。法は守るし、やりたいことは何でもやる——俺には直接関係ないことだ」

「君は村の隊長だろう、君の言葉は引くかかる」

「ヌール・ベイよ、言葉とは高価なものだ。俺はしゃべるのが苦手なんだ」

代官は唇をかんで決心を固くした。ミハリス隊長を見つめたが、相手はもう再び立ち上がって去ろうと扉の方へ眼をくぎ付けにしていた。『この不信心者の血統は野蛮なのだ』と考えた。『あべこべに、わが一族はこの男に昔の請求書を持つておる。この男の兄はわが父上を岩の上で虐殺したコスタロス——奴の骨がタールに塗れるように！——ではないか。わしはまだその時効かつたから、成長して復讐できるようになるまで我慢したのだ。しかし間に合わなかった。あの忌々しい奴めはアルカディ修道院でやられて木っ端微塵に吹き飛びおつたわ。奴の息子はまだしみたれたガキで殺すのは恥だったから、大きくなるのを待った。しかしひげを蓄えたらやつもわしから逃げおつた。フランスに留学しているという……いつ戻ってくるんだ？ わが父上の大蛇の血が！』

立ち上がった。扉の前に座った。腸が煮えくり返つて、制御できなかった。振り返った。ミハリス隊長のあごひげがランプの柔らかな光にもつれて茨のように生い茂つてつやつや輝いていた。それはクレタ島が解放されない限り切らないと決めたものだった。ヌール・ベイの目に稲妻が走り、冷笑が顔一面に広がった。待たせてやる、不信心者め、重くないの



なら、その膝まで、地べたまでひげが流れてゆき、根となり土の中に入るとも、否、クレタ島は解放を見ないだろう！われらはわれらの血を高く払った。そして二百五十年前、このメガロ・カストロはヴェネディア城壁の外側で殺されていたわれらの手に落ちて、われらはそれを離さず、それもわれらを離さず、われらの骨肉となったのだ。

ため息をついた。父親を思い出し、メガロ・カストロの塹壕の周りで殺されたすべてのムスリムたちを思い出した。彼とミハリス隊長との間には一本の血の川が流れていた。

「ヌール・ベイよ、熱心に嗅ぐなよ」ミハリス隊長はそう言うのと、ずかるために彼を押しつけるようと腕を伸ばした。

「膨らんだりしぼんだりするのはやめろ。あんたが俺に言ったことは無駄だ」

男の強さがヌール・ベイに戻ってきて、怒りを和らげた。

「ミハリス隊長よ、そんな風に立ち去るなよ」声を和らげながら言った。「そんな風に荒っぽく立ち去るな。まるで喧嘩別れしたみたいじゃないか。君がそんなに悩んでいるようなら、私は前言を撤回する。私は何も言わなかったし、君自身も何も聞かなかった。私たちは友達じゃないか。私は君と一杯飲み、おつまみをやるために君を呼んだ。鶉だ。わが村の女中を今連れてきているのだが、われらが一緒に喰うという

たのだ。ミハリス隊長よ、われらの昔を思い出そう。子供だった頃の。良い天気の日、われらの村で、ともに遊んだ時のような」

鶉の腿を切り、ミハリス隊長に惜しみなくふるまった。

「食べない、四旬節<sup>十五</sup>だからな」彼は返事した。

ヌール・ベイは両手を打ってうろたえた。

「把握しておくべきだった」と言った。「君に食べてもらっただろう、ムハンマド<sup>ト</sup>にかけて、黒い魚卵を」

グラスを満たした。

「ミハリス隊長よ、汝の健康を祝して」グラスを掲げながら言った。「君がかたじけなくも我が家の敷居を踏んで私と一緒にラキを一杯飲んでくれたことを嬉しく思う。ほれ。このようにわが血は流れよ、ミハリス隊長よ、もし私が君の不幸を欲したら」

そう言つて地面にシトロラキを二しずく落とした。

ミハリス隊長は腹を据えた。窓の隣の長椅子に座り直した。「ヌール・ベイよ、俺もあんたの不幸は欲さない、仁義にはもとのまい」そう言つてグラスを干した。

再び沈黙が訪れた。代官は汗をかき、立ち上がって窓を開けた。

外の庭園にある小さな噴水が、涼しげに、楽し気にどくど

く流れているのが聞こえた。室内にバラとレモン花の匂いが入ってきた。上階の女部屋からまた笑い声が聞こえてきた。

二人の男は黙っていた。ヌール・ベイはどこから会話を再開すべきか大変苦勞していた。そしてミハリス隊長は水声と笑い声に耳を傾けて中庭からの匂いを呼吸し、再び胸を煮えたぎらせ始めた。『ここはクレタだ。笑い声と匂い、そしてお前はトルコ人とラキを飲んでいるのか?』そう考えこむと窓を叩いて閉めた。

「ミハリス隊長よ、すまん、君に尋ねることなく開けてしまった」おろおろとヌール・ベイは言つて、再び二つのグラスにラキを満たした。

ミハリス隊長は戻つてきてトルコ人を見つめた。彼らは肥沃な土壌の上にある同じ村で生まれ、一方が代官で、他方が奴隷<sup>スラヴ</sup>だった。ミハリスの父親シファカス隊長は石材を生業としていた。当時騎乗するという自由を持っていなかったので、仔驢馬に乗っていたが、このヌールの父親である基督教迫害者ハニアリスに遇つた時はシファカス爺さんは驢馬から降りてご主人様を通り過ぎるのを待たなければならなかった。しかしある黄昏時、シファカス隊長はほろ酔い加減で驢馬から降りなかつたので、ハニアリスは鞭を振り上げてその不恭順な頭を血でいっぱいにした。老人はしゃべらず、激する心を

抑えて待望した。『キリストはアルバニア人ではなく正教基督者じゃ。わしの正義が実現される日がきつと来るじやろう!』と考えた。一年するかしないかのうちに一八六六年の革命が勃発して、彼の長男のコスタロスがある夜メガロ・カストロから跳び出して、残忍なハニアリスをベンデヴィスのカマーラにある岩の上で子羊のように屠殺した。そして今因果は巡り、ハニアリスの息子がメガロ・カストロにやつて来て偉大な長官として鎮座まし、庭園と噴水と柳かごを継承し、毎夕にはよく食べよく飲みよく抱擁し、麗しい昼には馬を駆つて近隣の羅馬帝國<sup>ロマニア</sup>地区やトリリス・カマーレスを精力的に見て回り、砂利道に火花を散らした。

ミハリスは煙草入れを取り出し、たばこを一本つまみ、鼻の穴を煙で満たした。隣にいるこのトルコ野郎を、どれほど憎み、愛し、嫌悪したことだろうか? このことを何度も自問したが、判断できなかった。そして、メガロ・カストロの裏小路か田舎への馬乗りでたまたまふたりがぶつかったときは、ミハリス隊長はヌール・ベイのふくよかで血色のいい顔を見て、怒りが沸騰し気が動転して、殺してやろうとも、よお久しぶりと仲直りした昔の友達同士のように抱擁してやりたいとも思うのだった。

幼い頃、彼らは一緒に村の脱穀場で遊び、走つて相撲を取

つてお互いを上にして下にして競い合い、笑い転げ、殴り合い、キスし合った。そしてある黄昏時、より成熟した男たちは、二人の騎士として、メガロ・カストロから一時間びつたりのペンデヴィスのカマールでぶつかり合ったのである。隣り合つて無言のまま、かなりの距離を進んだ。二人とも顔をしかめ、まったく不機嫌だった。再びトルコ人と基督教徒が殺し合う時代で、クレタ島は戦火に包まれ、奴隷が再び蜂起していた。

彼らは黙つたまま進んでいった。煤で汚れたヴェネツィア時代の城壁が沈みかけたかげろいゆく太陽から真つ赤に現れた。

『このトルコの犬野郎が、こいつがこれ以上羅馬帝國民の地区で馬を乗り回して女たちにちよっかいを出すのを俺は我慢できない！』とミハリス隊長は考えた。

『わしはこの不信心者がひどく酔っぱらうたびに家から馬に乗つて出てきてトルコを辱めるのをこれ以上我慢できない。去年わしを引きずつて革袋のように立たせて奴の店の屋根の上に置き去りにしおつたわ。野次馬が集まつてはしごを使つて降りたわ。恥をかかせおつて』と、ヌール・ベイは考えた。ヌール・ベイの頬は紅潮した。ミハリス隊長への憤激で心変わりして、呼びかけた。

「おい、ミハリス隊長、いいか、わしがお前を殺すか、お前がわしを殺すかだ。われらはメガロ・カストロで相いれない」「ヌール・ベイよ、だとすると、馬から降りてつかみ合いなのか？」

ヌール・ベイは答えなかった。昔に立ち返つて、このギリシア人を横目で見て、若者の印象を目に刻んだ。『なんという男ぶり、なんという誇り高さ、なんという凜々しさ！ 余計なことは全く言わない、威張らない、下衆どもの隅にはおけぬ、決して人を裏切らぬ。死神にさえ屈しない……かくのごとき敵を持つた人の幸いなるかな！』と考えた。とうとう口を開いた。

「ミハリス隊長よ、そう急くなよ、それは犯罪だぞ……わし……私自身後悔しておる。そうだ、わが信仰にかけて誓おう、私のムハンマドにかけても、君のキリストにかけても、それはお望みにはなるまい。君は豪傑だし、私もそうだと自分では思っている。われらの血を混ぜ合わせようではないか、だから」

「だから何だ？」

「われらは義兄弟になつてしまおう」

ミハリス隊長は馬に拍車をかけ、前に進んだ。心臓が膨らみ、喉まで昇ってきた。しばらくの間、頸静脈を鞭打つ血液

の音以外聞こえなかった。ゆつくりと、血液は沈殿してきて、頭が冴えてきた。奇妙な動揺に支配されたが、それはこの育ちのいい代官の息子と血を混ぜ合わせることで、もうこの男を殺せなくなるといふ喜びでもあった。この男を目にしたところすべてで、手にナイフを構えてやりたいという誘惑を悪魔祓いすることだった。これは男として誇るべきことであり、トルコ人にとつてもそうであつて欲しかった。メガロ・カストロの誇りであり、非の打ちどころのない——かつて誠実で、氣前が良く、美男で、陽気で、申し分のない、糞喰らえ！——男にとつても。

ミハリスは馬の手綱を引き、立ち止まった。ヌール・ベイは馬に拍車をかけ、走つてミハリスに追いついた。

「行こう！」ミハリス隊長は振り返つて見ることもせずと言つた。

黙つたまま、代官領の田舎家の方に戻つた。中庭に入った。召使が一人走り寄つてきて、ヌールとミハリスの馬を引き取り、馬小屋の方へ引つ張つていった。代官が手を鳴らすと、家政婦の老女がやつて来て、恭しく挨拶した。

「鶏を一羽絞めろ。大きくて、鶏冠のついたやつを。年代物のワインを取つて来い。大ベッドを二台設えて、絹と亜麻布のシーツを敷け。今夜われらは田舎家で食らいかつ眠るので

のう。行け、それと扉を開けていけよ！」と代官は命じた。彼ら二人だけが残つた。まだ花の咲き誇る虫食い穴の開いたオリーブの木の下で、向かい合つて、膝と膝を突き合わせた。陽はすでに落ちて、大きく楽しげな宵の明星が、オリーブの葉の間から滑り落ちていった。

ヌール・ベイは立ち上がつて外に出て、泉からスモモの太皿を外した。それは、通行人が飲んでそれを作つたハニアリスの名前に感謝するように吊るされていたものだつた。大皿を取つて、また中へ入つて地べたに胡坐をかいて座り直した。「ムハンマドとキリストの名において」と言つて、ベルトからナイフを取り出した。

ミハリス隊長は外套の右袖をたくし上げた。日焼けしてごつい毛むくじやらの腕が現れた。ヌール・ベイは直角に立てたナイフの先で、赤身の肉の中で浮き出している短い静脈を一本刻んで切り目を入れた。黒くて熱い血液が震え、ヌールは皿を下に置き、指を浸した。それから自分の白いターバンを解いて、傷つけた腕をきつく縛つた。

「君の番だ、ミハリス隊長」と言つた。

「基督とムハンマドの名において」とミハリス隊長は言つた。そして彼もナイフを抜いて、代官のふくよかにかわいらしい腕を傷つけた。その血が皿の中に流れこんだ。それからミ

ハリス隊長は自分の黒いヘッドバンドを外して、代官の腕に強く巻き付けた。

二人の間に皿を置きつばなしにして、しばらくすると、二人とも無言のまま皿をかき回し始めた。

十分日は暮れて、田舎家の煙突から煙が立ち上り、召使たちは地べたを走り回った。二人の男はナイフを自分の髪の毛で拭ってまたベルトに刺した。

ヌールは皿をぎゅっとつかんで、高く持ち上げた。その声が高く、厳かに、宣誓のように響いた。

「汝の健康のために飲むぞ、ミハリス隊長、義兄弟よ！ われは誓約する、宜、ムハンマドに誓いて、汝を決して煩わせぬと。言葉においても、行いにおいても。戦においても、晴れの日においても。誠実さと勇敢さ、わが名誉にかけて！ われは数多のギリシア人を有し、汝は数多のトルコ人を有する。汝の恨みを捨てよ！」

そう言つて、皿を口元まで持つてきて口にふくむと、ゆっくり、混ぜ合わせた血を飲み始めた。半分飲んだ。口を拭つて皿をミハリス隊長の方に差し出した。

ミハリスはそれを掌で受け取った。

「あんたの健康のために飲むぞ、ヌール・ベイ、義兄弟よ！ 俺は誓約する。宜、基督に誓つて、あんたを決して煩わせな

いと。言葉においても、行いにおいても、戦の時も、晴れの日も。誠実さと勇敢さ、俺の名誉にかけて！ 俺は数多のトルコ人を有し、あんたは数多の基督者を有する。汝の恨みを捨てよ！」

そして一口で底まで血を飲み干した。

【註】

- 一 本作品は Νίκος Καζαντζάκης: Ο ΚΑΛΙΕΤΑΝ ΜΙΧΑΗΛΣ Ελευσινία καὶ Θάλασσα, ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ, ΑΘΗΝΑ 2017 の第一章の前半部分の訳である。作者カザンザキスの紹介は、この欄では控える。
- 二 イラクリオの古称。
- 三 ミカン科の常緑低木の果実。紡錘形で酸味が強い。丸仏手柑。
- 四 Σποδίουόλας : イラクリオの西方約二一キロメートルにある標高七八メートルの円錐形の山。
- 五 クレタ島のレシムノの近くにある修道院。一八六六年にギリシアの愛国者たちが抛って全焼した。
- 六 クレタ島西部、ハニアの西にある小都市。
- 七 キクラデス諸島中の島。
- 八 Αλ-Μάκρας : ギリシア正教の聖人。(紀元後二五九年―二七五年)。
- 九 旧トルコの重量単位、約一・二キログラム。
- 十 クレタ島北岸、イラクリオの北西にある湾。ビーチで有名。
- 十一 クレタ島南部にある平地。
- 十二 チェルケス族は北カフカスの先住民族。自称アドウイゲ。
- 十三 トルコのチャシュメの対岸にある東エーゲ海のギリシア領の島ヒオス島だけで生育する木から取れる樹液。
- 十四 イラクリオの中心街、目抜き通りの広場。エレフテリアス広

場のこと。

十五 キリスト教の復活祭において、その四十日前から始まる齋戒期。イエスの荒野における四十日間の断食と試練を記念するもの。

本翻訳を成す上で益するところのあつた文献の数はあまりにも多いのでここにすべてを挙げることはできない。せめて使用した主だった辞書、辞典だけでも挙げておきたい。

『現代ギリシア語辞典 第三版』川原拓雄著、リーベル出版、東京、二〇〇四年

『ギリシヤ語辞典』古川晴風編著、大学書林、東京、一九八九年

『ギリシア・ラテン引用語辞典』[新増補版] 田中秀央・落合太

郎編著、岩波書店、東京、二〇〇七年

『トルコ語辞典 改訂増補版』竹内和夫著、大学書林、東京、二〇〇三年

『ブリーモ伊和辞典 和伊付』秋山余思著、白水社、東京、二〇〇八年

*Collins Greek-English Dictionary, first edition 2003: Harper Collins*

*Publishers, Glasgow 2003*

*THE OXFORD Paperback GREEK DICTIONARY, Niki Watts, Oxford University Press Inc., New York 1997*

ΑΕΙΚΟ ΤΗΣ ΝΕΑΣ ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΓΛΩΣΣΑΣ, ΤΡΙΤΗ ΕΚΔΟΣΗ,  
ΓΕΩΡΓΙΟΣ Δ. ΜΠΑΜΠΙΝΙΩΤΗΣ, ΚΕΝΤΡΟ ΑΕΙΚΟΛΟΓΙΑΣ  
Ε.Π.Ε., ΑΘΗΝΑ 2008

ΕΤΥΜΟΛΟΓΙΚΟ ΑΕΙΚΟ ΤΗΣ ΝΕΑΣ ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΓΛΩΣΣΑΣ,  
ΔΕΥΤΕΡΗ ΕΚΔΟΣΗ, ΓΕΩΡΓΙΟΣ Δ. ΜΠΑΜΠΙΝΙΩΤΗΣ,  
ΚΕΝΤΡΟ ΑΕΙΚΟΛΟΓΙΑΣ Ε.Π.Ε., ΑΘΗΝΑ 2011

ΕΛΛΗΝΟ-ΓΑΛΛΩΝΙΚΟ&ΓΑΛΛΩΝΟ-ΕΛΛΗΝΙΚΟ ΑΕΙΚΟ, ΤΕΤΑΡΤΗ  
ΑΝΑΘΕΩΡΗΜΕΝΗ ΕΚΔΟΣΗ, ΒΑΣΙΛΗΣ ΚΟΡΑΚΙΑΝΤΗΣ,  
ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΠΑΠΑΔΟΠΟΥΛΟΣ, ΑΘΗΝΑ 2016

Επισκοπή του πρώτου ΑΓΓΛΟ-ελληνικού Λεξικού, Τρισυγγενή Παράδοση,  
ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΠΑΠΑΚΗ, Αθήνα 2017

ΓΛΩΣΣΑΡΙ στο έργο ΤΟΥ ΝΙΚΟΥ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ, Βασίλειος Α Γκόργας,  
ΠΑΝΕΠΙΣΤΗΜΙΑΚΕΣ ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΡΗΤΗΣ, ΗΡΑΚΛΕΙΟ 2022

本翻訳を成すにあたっては、福田耕佑氏の懇切な指導が無ければ成しえなかったであろうことをここに特記し、深甚なる謝意を表します。また、京緑社編集部にも貴重な資料を提供いただきました。併せて感謝いたします。

二〇二三年九月 其原哲也